



北部会 市民公開講座「漢方薬の功罪」

日時：2006年9月15日(金)14:30-16:30

会場：弘前文化センター

講師：柴原直利教授（富山大学和漢医薬学総合研究所・漢方診断学部門）

石崎高志教授（帝京平成大学薬学部臨床薬理・内科学）

第57回北部会を弘前で開催するに当たり、当時の遠藤政夫広報委員長から、日本薬理学会主催の市民公開講座を北部会時に開催してはどうかという打診があった。地方都市における学会主催の市民公開講座のあり方を十分咀嚼しないまま、科学研究費補助金「研究成果公开发表(B)」の申請をすることになり、テーマを考え、講師を考えている中に今回の主題「漢方薬の功罪」に辿り着いた。

ITおよび流通機構の進歩により、一般市民にも漢方薬関連物質が簡単に入手可能となったが、それによる死亡例も報告され、漢方薬関連物質の基礎および危険性について、正しい知識を一般市民に伝えることが急務となっている。加えて、日本社会は高度な高齢化社会を迎えて疾病構造が変化し、生活習慣病を初めとするあらゆる疾患が慢性化しており、これまでの西洋医学一辺倒では対処できなくなってきた。そこで伝統医学としての東洋医学の役割が再認識され、薬物治療学の分野で西洋医学と漢方薬の接点が模索されている。問題は東洋医学をサイエンスとして遇するには西洋医学のスタンダードによるEBMが乏しいことにある。

一方、不定愁訴を初めとして原因のハッキリしない境界領域の症状に対して、鍼灸や漢方に代表される相補代替医療が注目されている。弘前大学がある青森県津軽地方は、脳卒中罹患率全国第一位であり、脳卒中後遺症のリハビリテーション中の症状に漢方薬の使用頻度が増えている。又、自殺率は秋田県に次いで全国第2位であり、自殺の前駆症状とも言える心身抑うつ状態に対する漢方薬の使用も増えている。このような周囲環境で、患者は勿論、家族も「漢方薬は副作用が

無い」といった誤った情報を信じて（信じたくて）服用している状況がある。このような非科学的考えが蔓延っている一般社会の現状に、西洋医学のスタンダードによるEBMに基づいて「漢方薬を含めて副作用のない薬物は無い」という認識を浸透させ、正しい薬物治療と一緒に考える場が必要であると考えた。そしてその場を提供するべく「漢方薬の功罪」と題して、「西洋医学と東洋医学の考え方の違い」「漢方薬や相補代替薬の薬物相互作用」を一緒に考えることを目的としてこの市民公開講座を開催するに至った。

今回、市民公開講座を2006年9月15日の14時30分から開催した。第57回北部会二日目の学術集会、評議員会が終了後、引き続きという設定だが、人口17万の地方都市弘前で、平日(金)の午後に「市民」がどの位集まるか全く見当がつかなかった。結局100名目標で70名の参加を得て安堵した。職業は主婦、会社員、学生、薬剤師も8名、医師数名、年齢も20代から70代まで多彩であった。

「漢方薬の功罪」を市民レベルで考えるに当たり、先ず「西洋医学と東洋医学の考え方の違い」について、この分野の第一人者である富山大学和漢医薬学総合研究所・漢方診断学部門の柴原直利教授にお願いした。漢方薬の「功」について、「生活習慣病と漢方」というタイトルで、最近西洋医学で話題のメタボリック症候群にも触れて、生活習慣病を予防するために必要な養生（漢方で食事や生活環境を正す事）と漢方薬について、非常に分かりやすくお話いただいた。一方、漢方薬の「罪」について、一般社会人レベルで乱用されているサプリメントを含む相補代替薬そして漢方薬の薬物相互作用および副作用について、薬物代謝酵素の遺伝子多型という最新の西洋医学のEBMに基づく切り口で、日本の臨床薬理学の第一人者である帝京平成大学薬学部臨床薬理・内科学の石崎高志教授からお話頂いた。

お二人の話を統合して、患者は自分が漢方薬を使用していることを積極的に医師に話すことが、漢方薬についての正しい認識と正しい使い方を共有することに繋がると座長が締め括った。（古川賢一）

